

種壺クラブ



設定

ボディビルダー学生 × 変態監督。

高校時代の野球部の先輩が所属するバーベルクラブに入部した主人公。

そこでは指定のプロテインの摂取が義務付けられているが、媚薬の効果と依存性があり、それを求め、監督の言いなりになっていく……。

※「依存」をテーマとした物語で、少し洗脳要素もあります。

※最初からずっと種壺として使われるというよりは徐々におとされていき最終的に……という感じです。

オナニー、開発、貞操帯、複数、公開セックス、飲尿、犬扱い、公開脱糞、種壺化、アヘ顔等

18000 字程度で、画像のみ AI で作成しています。

登場人物

池谷 翼(いけたに つばさ) 19 歳 1年

明るく無邪気、人に好かれやすい。

神谷 恵一(かみや けいいち) 21 歳 3 年

翼の高校の先輩でバーベルクラブ所属。

須藤 明(すどう あきら) 40 歳 監督

体育会気質。ほしいものを手に入れるためには手段を選ばない。

歓迎

長い受験の戦いを終え、ようやく念願だった大学に入学できた翼は咲き誇る桜の花びらのようにうかれていた。

高校時代に尊敬していた野球部の先輩、神谷が所属するというバーベルクラブ、そこに自分も所属することにした。

バーベルクラブは体を鍛え、その鍛えた体でボディコンテストに参加したりしている。人に体を見られるのは恥ずかしいが、体を鍛えるのはもともと好きだし、なにより神谷とまたいられることを楽しみにしていた。

神谷は「他の部も見た方がいい」といったが、翼はふくれながら「おれはここがいいんです」と言い返した。神谷は翼の無邪気さに高校の時のように笑いながら、翼がなじめるかどうか心配しているのか、どこか不安そうだった。

新入生は翼ひとり。先輩たちをあわせても 10 人程度。小規模なクラブだが、皆優しそうで、そして皆バキバキの筋肉をもっていた。

監督も歓迎してくれ、優しくクラブのルールを説明してくれた。

このクラブでは練習の時からボディビルダーが着用するビルダーパンツのみを着用してトレーニングする、また皆決まったプロテインをのまなければならない等。

それを飲むと、体がほてっていく。エネルギーが満ち溢れる感じだ。そして、股間に血液が集中してしまう……。それは先輩たちも同じで、皆ギンギンになりながらトレーニングしている。翼以外は誰も恥ずかしがってはいないようで、堂々とその肥大化したもっこりをさらしている。神谷の股間がギンギンに勃起してびくついているのを見るのはちょっと複雑だったが、それも次第に慣れていった。

最初は飲むことに抵抗があったプロテインも今では逆にその時間が持ちどおしくなっている。授業が終わり、トレーニングルームに駆け込み、監督からプロテインを支給されるあの瞬間を……。

(はあ……はやく部室行って、プロテイン飲んで鍛えてえ。トレーニング後もらえるしな……)

授業中でもムズムズとして、クラブに行くことを考えてしまう翼。授業終了のベルが鳴ると、すぐさまクラブへ向かう。そして、ビルパンに着替えて、監督のもとへむかった。

「監督、お疲れ様です！あの、プロテインいただけますか？」

あわてた様子の翼を見て、ニヤニヤとする監督。

「もちろんやるが、あれもただじゃない……。お前が期待に応えてくれたら出してやるよ……」

「え……」

監督の須藤はゆっくりと翼に近づくと翼に抱き着き、体を触ってくる。

「ちょ……ちょっと何してるんですか……」

翼は思わず体をはねのけ、後ずさる……。

「監督にそんな態度とっていいのか？ほしいんだろあのプロテインが……」

(ほしい……今すぐにでも飲みたい……飲んで体をほてらせながら鍛えたい……)

「……すいませんでした」

監督は再び翼に近づくと、体を抱きしめ、翼の尻をもみだす。

(嘘だろ……この人ってそっち系だったのか……プロテイン飲みたいけど……こんなのって……)

ふるえながら耐えている翼の体を堪能していく。

「や……やっぱり無理です……」

翼は再度監督の手を払うと、その場から駆け出した。頭の中は混乱していてどうすればいいかわからなかった。大学の近くにある家に戻り、一人布団の中でふさぎこむ。もう辞めるしかない……あんなのおかしい……それでも体はあのプロテインをほっしている。どうしようもなく体が疼く。

翼は気づけば再びバーベルクラブの監督の部屋の前にいた。あれがないと体がどうしようもなくなる。おかしいのは分かっているが、一刻も早くあれを飲みたい。何をされるのか分からないが、とにかくあれを……。

「監督……さきほどはすいませんでした」

「悪いと思っているのであれば土下座であやまれ、それぐらいできないとまた逃げ出すからな」

翼はふるえながら、それでも跪き頭を床につける。それぐらいの覚悟をもってきたことをしめしている。

「逃げ出して……申し訳ありませんでした……」

「このプロテインはとても高価なんだ……お前たちの部費だけではとてもまかなえない……俺にもうまみがないとわりに合わないだろう……」

「はい……」

「わかったら、ビルパンを脱いで、俺の前でオナニーをしてみろ。俺に誠意を示せ」

「……オナニーですか……」

「やらないのか……？」

「……やります……」

プロテインの欲求に支配されている体はびくつき、そしてペニスもすでに膨張している。その膨張したペニスを監督にさらし、しごきだす翼。

（俺のオナニーみて……何が楽しいんだよ……変態かよ……うう）

「はあ……うう……はあ……はあ……」